

国語

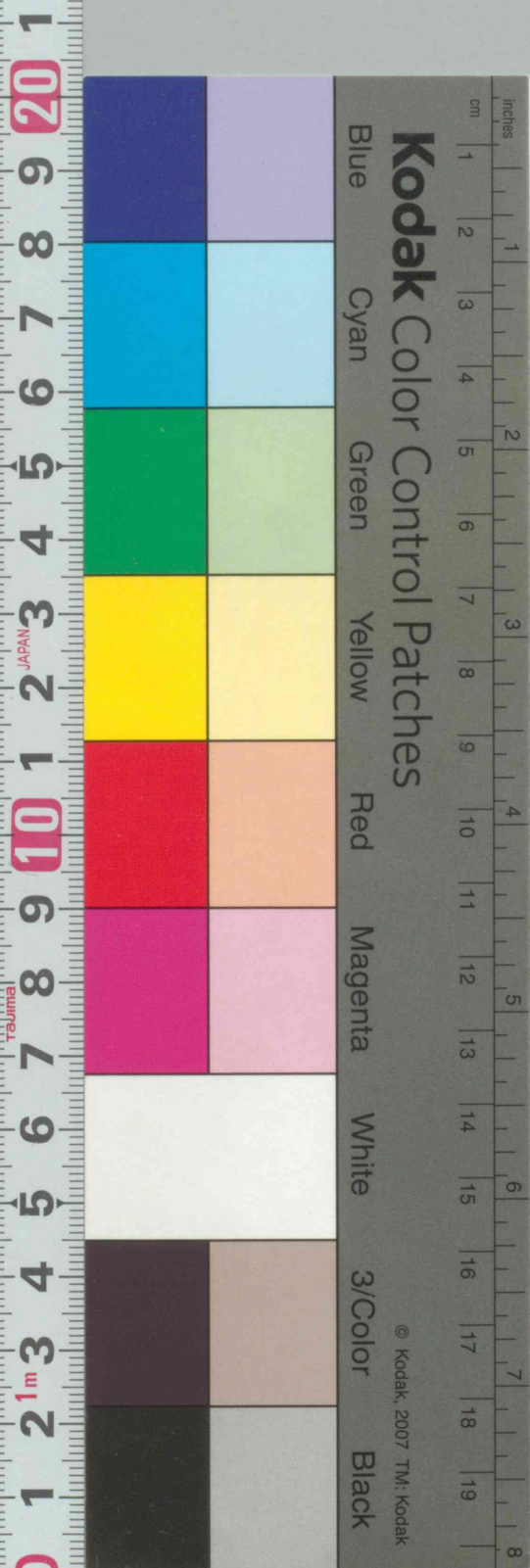
第五学年

上



3a  
810  
部24

教科書



Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Gray Scale

C

Y

M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

60397

教科書文庫

6  
810  
34-1989  
2000  
67192



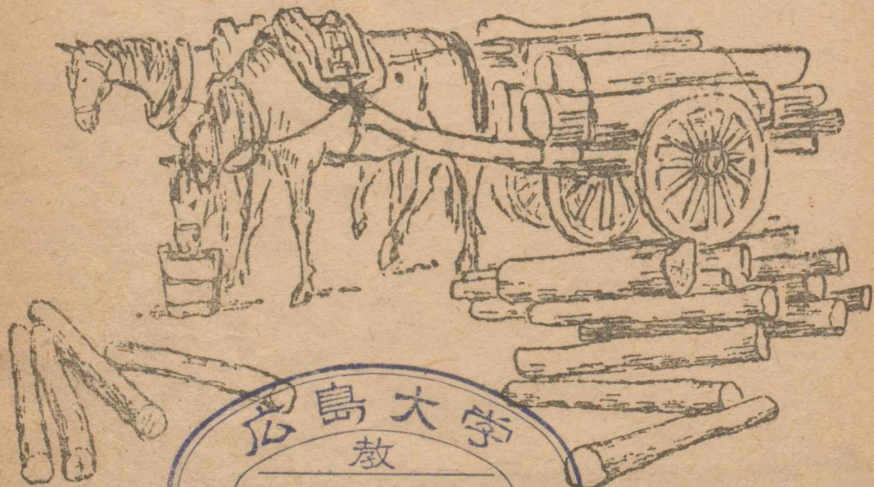
資 料 室

国

語

第 五 学 年

上



32  
810  
AB 24



もくろく

一 美しいもの……………四

二 ことばの愛……………七

少年・少女

自分の国のことば

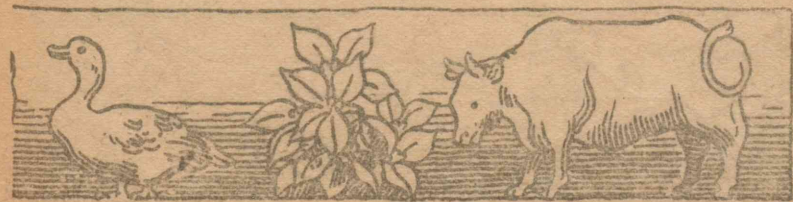
三 日の光……………十八

四 あなたの思っていることは……………二十七

(一)

(二)

(三)



五 発明二つ……………三十二

自動織機

しんじゆ

六 私の妹……………四十七

妹のことば

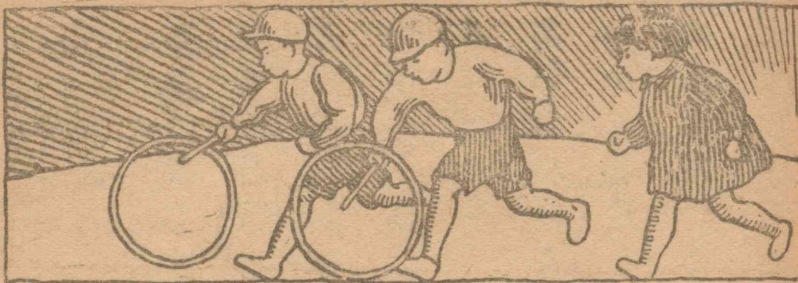
新しい世界

妹の作文

七 ぶす……………六十二

能ときょうげんについて

きょうげん「ぶす」



一 美しいもの

青空の美しさ、

朝明けの空、夕やけの空の美しさ、

月の夜、星の夜の美しさ、

いまも、美しいものはどこにでもあ  
る。

高い木が大きくえだをはって、

わかめをだしかけたこずえのさきが、

かすんだ空の中にとけこんでいる。

じつに美しい。

小鳥が鳴いている。

風が、かすかに耳もとをすぎる。

耳をすますと、なにか、かすかな音

楽がきこえてくるようだ。

どこからきこえるともないが、どこ

からかきこえてくる。

美しいものは、いまも、どこにでも

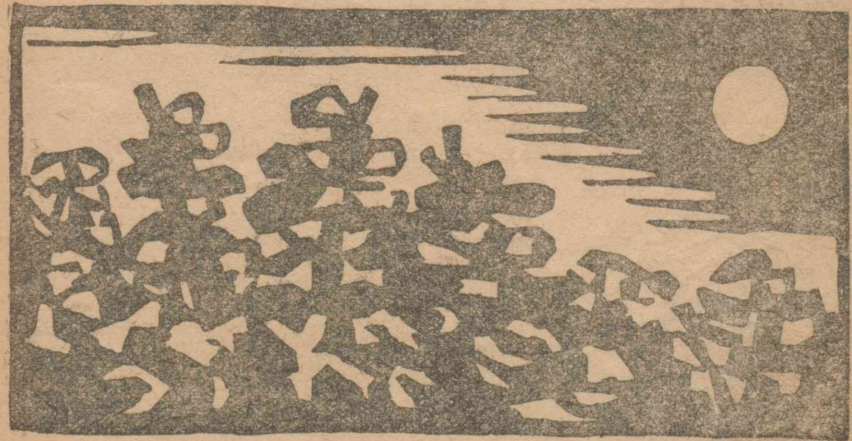
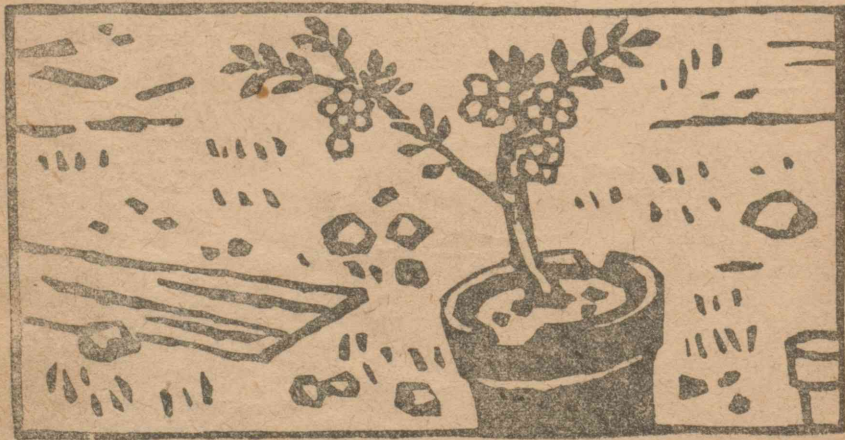
ある。

ただ、その美しいものを、すなおに

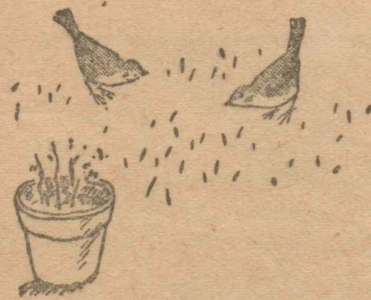
感じとる心を、われわれは失ってい

る。

毎日の生活のらんざつとあわただし



さの中に、それを失っている。  
しかし、われわれは、いつでも、どこにでも、その美しいもの  
のを、すなおに感じとる心を、もちつづけたいものである。  
心がけひとつである。  
心がけひとつで、われわれは、どんなにでも毎日の生活を、  
ゆたかに、楽しくすることができる。



## 二 ことばの愛

### 少年・少女

おとうさんが、フランスのいなかへいったときは、子どもが大ぜい、めずらしそうについてきてこまりました。そういういなかへは、めったに日本人もいかないのです。日本人をみたことがない子どもたちは、おとうさんが通るたびに、目をまるくしました。おとうさんの歩いていくそばを、足ばやにかけぬけていって、てんでに、おとうさんの顔をのぞきこむようにしました。

こんなにいるさくついてこられたときには、おとうさんもこまりましたので、子どもをさけて通ったこともありました。

しかし、おとうさんは、子どもと遊ぶことが好きですから、道で子どもたちが、なわとびをして遊んでいたりますと、そのなかまいりをして、なわをまわしてやったこともありました。二月半ばかり、いなかでくらすうちに、おとうさんには、子どものお友だちができました。そういう子どもの中には、道でおとうさんをよびとめて、「日本人、くりをおあがり。」といいながら、おとうさんにわけてくれる少女もありました。



あのとげとげしたいががわれて、じゆくしたくりの實の落ちるころでしたから。



おとうさんは、知らない外国人どうしても、こんなに親しみをもつことができるとかと思いましたが、その少女のわけてくれたくりは、むじやきな心からでた、子どもらしい愛情のしるし

てした。

ちょうど、ブラタナスという木の葉が黄色くなるころで、いなかの子どもにとっては、もっとも楽しい季節でした。どこへ

いっても、遊びたわむれている子どもにいました。

そのいなかの町には、ボンナフという石の橋があって、イエ  
ンヌという川が、その下を流れていました。

岸にあるおかの上には、セントテチエンヌというお寺の高いと  
うもみえました。

そのあたりは、フランスの国道にそった景色のよいところで  
すから、橋のたもとの休み茶屋へは、おとうさんもよくいつて  
こしかけました。その橋のたもとにあるブラタナスのなみ木の  
下で、おとうさんは、三人のかわいらしい少女にもあいました。  
みあげるように高いブラタナスのえだからは、黄色い葉が毎  
日のように落ちました。三人の少女は、その葉をひろい集めて、  
橋のたもとの石がきのところへきては、遊んでいました。おと

うさんが、休み茶屋のまえにこしかけ  
て、コーヒーをわかしてもらっていま  
すと、きまつて、その少女たちも遊び  
にきています。いずれも、八つばかり  
の子どもたちでした。

ある日のこと、おとうさんが、子ど  
ものすきそうなおかしを、一ふくろやっ  
たのがはじまりで、その少女たちは、  
おとうさんのそばへくるようになりま  
した。ひろい集めた落ち葉を持ってき  
て、おとうさんにくれるようになりました。

ブラタナスの葉の大きいのは、やつてほどもありました。



「旅の記念として、本のあいだへでもはさんでおきたいのです。なるべく、小さな葉をくれませんか。」

と、おとうさんがたのみますと、少女たちは、手をとりあつてとんでいって、小さなのをえらんで、ひろってきてくれました。こうして、ずんずんおとうさんのそばへきて、さまざまなことを話しかけたり、わらったりしました。けれども、お友だちにさそわれても、どうしてもおとうさんのそばへこない女の子もありません。

「おお、こわい。」

と、ひとりの少女が、おとうさんをみてそういいました。

「おいで、わたしといっしょにお話をしておくれ。ちようどあなたたちと同じ年ぐらいな子どもを、わたしは、自分の国に

のこしておいてきました。わたしは、そんなにこわいものではないありませんよ。」

おとうさんがいいました。

それから、三人の少女に、歌を歌ってほしいとたのみました。方言でできた小歌のあることを、おとうさんは、きいて知っていましたから。

少女たちは、おとうさんのこしかけているそばで、コーヒー茶わんのおいてあるテーブルをかこんで、いなかの歌を歌ってきかせてくれました。

なんとかわいらしい子どもたちではありませんか。あんないなかはつまらないと、わるくいう旅人もありますが、おとうさんがそのいなか町がすきになったのも、一つは、そういうかわ



いらしい子どもがいて、なかよしになってくれたからです。

イエンヌという川の岸には、手ぬぐいのようなものをかぶった女の入たちが、ならんでせんたくをしていました。フランスのいなかによくみかける、赤いかわら屋根の家が、川の水にうつっていました。その川の岸で、おとうさんは、ひとりの少年にもあいました。

たぶん、その少年は、小学校のいちばん上の学年か、またはそのいなか町にある商業学校の下の学年ぐらいでしたでしょう。おとうさんのそばへきて、あいさつをしてから、

「日本とフランスとは、どちらがきれいですか。」とたずねました。

この少年の間には、ちよつとおとうさんもこまりました。フ

ランスだって、きれいなところもあり、きたないところもあり、日本も、やはりそのとおりですから。おとうさんがしようじきにその答をしましたら、少年は、さらにこんなことをいいました。

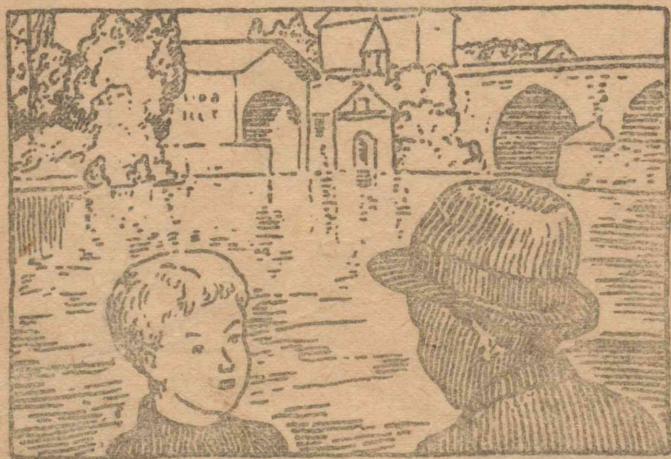
「日本の海はどんな色ですか。」

「それはすきとおった青い色ですよ。」

「おとうさんが、力をいれて答えました。」

この返事に、少年も満足したらしく、

「ああ、すきとおった青い色ですか。」



と、日本の海の美しさを、思いうかべるようにいいました。フランスのいなかの子どもから、自分の国のことをきかれたときは、おとうさんもうれしく思いました。かしこそうな目つきの少年でした。

### 自分の国のことば

「おとうさん。」

と、太郎がそばへきて、外国ではどんなことばを話すかとたずねるものですから、「そりゃあ、フランスではフランスのことば、イギリスではイギリスのことばを話すよ。」と、おとうさんがいつてきかせました。

「子どもでも。」

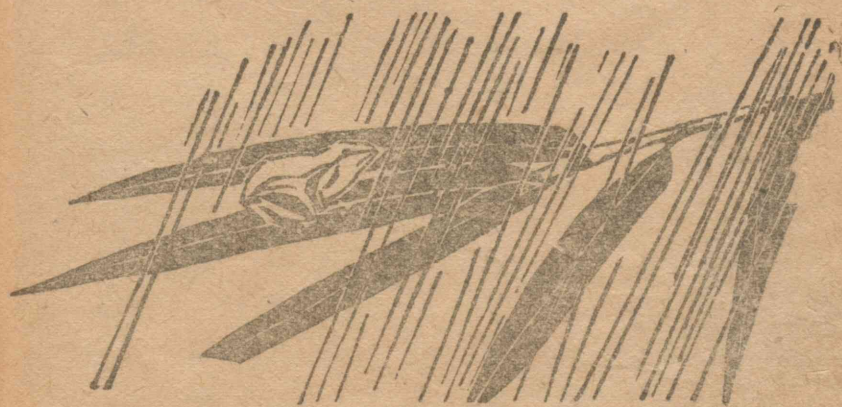
と、また太郎がたずねましたので、おとうさんは答えました。

「太郎よ、フランスでは、さかな屋さんでも、やお屋さんでも、みんなフランス語です。えんびつ一本買いにいくにも、日本のことばでは通じません。『こんにちは』なんていったって、だれもわかるものがありません。」

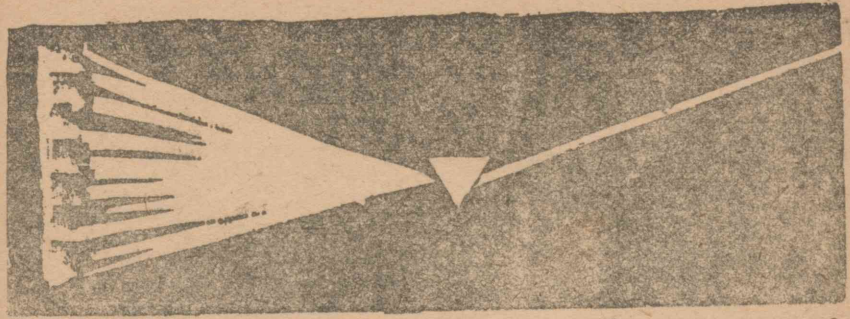
そういう遠い国へいくと、自分の国のことばがこいしくなります。こうしておまえたちに話すようなことばが、思うぞんぶんつかってみたくあります。わたしは、外国でくらしてみても、つくづく、自分の国のことばのありがたみを知りました。おまえたちは、おさな心にも、ことばを愛することを知って、勉強したら、どんなにしあわせてしよう。」

三日の光

- 1 黒い雲が流れてくる。はげしいにわか雨。暗い木立。
- 2 いけのおもてにはじける雨あし。竹の葉さきからしたたるしずく。その下で、きよんとしているあまがえる。
- 3 わら屋根ののきから、たきのよりに落ちる雨水。その下で、雨やどりをしている



- 4 小学校のかわら屋根から雨がしたたる。だんだんまどおになる。「ことばの愛」を読んでいる声が、きこえてくる。
- 5 ひとりの子どもが、立って本を読んでいる。友だちの顔、顔、顔。先生の横顔。
- 6 また、「ことばの愛」のつぎの一節を読んでいる声がきこえる。もうあ学校の教室である。ひとりの生徒が、席にすわったまま、点字を読んでいる。ほかの生徒の指さきが、すばやく点字の上をすべっていく。オルガンがひびいてくる。まどをあける女の先生。
- 7 「あ、きれいなにじ。」



8

村の林の上に、大きな半円形のにじがかかっている。

「にじの歌を歌う子どもの声。」

9

暗室。

「さあ、その白いかべに、プリズムでわけた光を写してみますよ。」

という先生の声とともに、七色の光が写しだされる。

「ただ白っぽくみえる太陽の光線ですが、わけてみると、こんなにさまざまな色になります。」

10

せんたく物のほし場。

まえかけや、しきふや、ハンケチなどが、風にゆれている。

その下を、あひるがならんで通っていく。

そのあとから、小さな子どもが、よちよちと歩いてくる。

母親が、両手をのばしてついてくる。

11

病院の庭さき。

かんどふがもうふをほしている。

男の子がベッドにすわっている。

「おかあさん、雨がはれてきれいね。」

まどに花のはちをおきながら、

「ごらん、にじがでているよ。」

まどをのぞく子どものはればれした顔。

「早く、あの野原で、遊びたいな。」

「もうじきですよ。」

「お友だち、どうしているかな。」

12 ひとりの友だちは、水えのぐで写生を  
している。

光る白い雲、遠い山のみね、村の道、  
やえざくらの花。

13 ひとりの友だちは、その兄といっしょ  
に種まきをしている。

きれいにたがやされた畑。

田をならしている農夫。

14 ひとりの友だちは、妹をつれて、つっ  
みの上でつみ草をしている。



「春の小川の歌がひびいてくる。」

小川の水、きらきら光る。

15 いちめんのなの花。

ひとりの女の子が、「なのはな、なのはな、まつのき。」と、  
大きな声で歌う。

自転車に乗った中学生が、ふたりづれてなの花畑を横きる。

16 ひとりの友だちは、母といっしょに汽車に乗っている。

窓からみえる村の家、まつなみ木、竹やぶ。

新しい家のたった町、ふみきりばんのおじいさん。

トンネル。

17 ひらけて、海、長い海岸線、うちよせる波、おきの漁船  
島。

18

炭ここの風景。

エレベーターをあやつる大きな車輪が、まわっている。  
トロッコをおして、炭ここのにはいつていく工員。  
ヘッドライトにたよって現場に近づく。

地下水の流れ。その流れのかすかな音。

石炭のこう道。工員たちは、さくがん機やつるはしを持って、石炭をほっている。

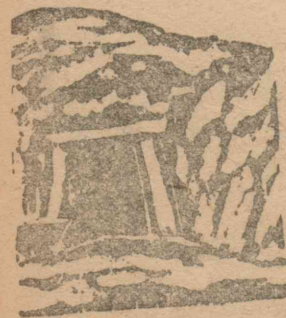
19

あせまみれになった工員の顔。むね。うで。  
たくましい音楽。

くずれくだける石炭。シャベルですくう  
石炭。

20

みるまに、トロッコにつまれる石炭の山



21

おしだされてくるトロッコ。  
ごうごうたるトロッコのひびき。

ひとりの工員がしごとをすませて、ここの  
内から地上にててくる。

まぶしい日光。

22

坂道を、ゆっくりとした足どりで、家に  
帰ってくる。道ばたにさくたんぼぼ、と

びかうちようちよ。立ちどまって、両手  
をひろげて深ききゆう。

23

「おとうさん。とよぶ声。

その声をきいて、にっこりとわらう顔。

「おうい。」



また、「おとうさん」とさけぶ。

「おうい。」

工員も走りだす。

24 男の子が、もちゅうになつてかけてくる。

工員は男の子をだきあげる。

ふたりのうれしそうな顔。

日の光をいっぱいを受けた、はればれとした父と子。



四 あなたの思っていることは

(一)

ぼくは、いままでに学んだ「自然の観察」を、ずっとつづけていきたいと思ひます。

わざわざ遠くにでかけなくても、ふだん自分の身のまわりにあるものを、よくしらべてみる心がまえを、つくりたいと思ひます。庭の木に小鳥がくれば、その鳴き声や、とまりかたや、動きかたや、はねの色や、形などを、こまかにしらべたいのです。トマトが畑に植えてあれば、そののびかたや、花のさきかたや、実のなりかたなどを、たんねんにみようと思ひます。また、くもがのきにすをかけることがあれば、すのはりかた

などを、しらべておきたい  
と思います。

こんな動植物だけではな  
く、雪のようすや、星の世  
界なども、しらべていきな  
いと思います。

観察すればするほど、自  
然のおもしろさもわかり、  
そのふしぎなことにくたれ、  
美しさにおどろくにちがいありません。

(二)

私は、同じものをみるにしても、どうしてそのものがこうなっ  
たかということ、考えてしらべたいと思っています。

たとえば、毛糸のあみ物があれば、そのあみかたはどんなあ  
みかたか、なぜ、このようなあみかたをしなければならなかつ  
たのか、よく考えてみたいと思います。

また、一つの和音を耳に  
したときは、組みあわされ  
た一音一音のことも、心に  
うかべてみたいのです。

もようをみたときには、  
そのもようが、どんな単位  
からなりたっているか、そ





れをさがしてみようと思います。

もし、弟や妹がけんかでもはじめたら、どうしてそんなことになったか、そのわけをよく考えていってみようと思います。このように、なんでも、そのもとのことをしらべていくような心がけを、もちたいと思います。

(三)

ぼくは、みんなといっしょにはたらかきたいと思います。

家では、弟たちのめんどうをみてやり、兄や姉の手助けになりたいと思います。父や母のために、いつもすなおな子どもになりたいのです。

そうして、うちじゅうの人たちに、めいわくをかけないよう

にしたいと考えます。

ぼくがいるために、うちの中が明かるくなるように、できないものでしょうか。ぼくがいるので、みんな楽しい気持ちになるようにできないものでしょうか。

学校では、組の友だちとなかよくして、助けあっていきたいと思えます。かげて人のわる口をいわないようにしたいし、自分のもっているいいところを、えんりよしないであらわし、友だちのいいところを、すなおに学んでいきたいと思えます。

自分をえらそうにみせかけたり、人をだましたりしないで、ありのままのすがたで、つきあっていきたいのです。

ぼくは、学校の生徒のひとりとして、りっぱにそのつとめをはたし、自分ひとりぐらいどうでもいいというような、無責任

な。ひきような考えをもちたくはありません。

ぼくは、この学校では、かけがえのないひとりであることを、ほこるようになりたいものです。

いつも、全体の中の部分、部分があつての全体、というつながりをわすれないで、あいての人をうやまうとともに、自分のつとめをはたすだけの勇気を、もちたいと考えます。

## 五 発明二つ

### 自動織機

「はたばかりいじっていて、おかしなやつだ。男のくせに。」

豊田佐吉は、村の人々から、こういつてあざけられた。佐吉

は、父の大工のしごとを助けてはたらいていたが、ひまさえあれば、織機のことをしらべつづけていたのである。

村じゅうの者から気持ちがいかつかいにされるのを見て、父は、「おまえは大工のせがれだ。ほかのことを考えないで、みっちりしごとをやってくれ。」

とさとしたが、佐吉のもえるような研究熱は、どうすることもできなかつた。それで、父は、佐吉の心をいれかえさせるために、佐吉をよその大工の家にあずけてしまった。

このあいだに立って、佐吉をはげましたり、なぐさめたりしたのには、母であつた。

佐吉の考えはこうである。人間の衣食住というものは、みんなたいせつなものであるから、ぬのを織るしごとにも、けつして

ゆるがせにしてはおかれない。いまのようなぬのの織りがたを  
していたのでは、やがて、こまるときがくるにちがいない。そ  
のため、いまのうちに、早く織機を進歩させておかなければ  
ならない、というのである。

佐吉が、はじめに目をつけたのは、ぬのを織るとき、たて糸  
のあいだをぬっていく横糸であった。横糸はひによつて、右か  
ら左、左から右へといききするのであるが、これを人の手によ  
らず、機械の力で動かすようにしたかった。機械で動かせば、  
もっと早く織ることができるし、ひとりてに、ぬのがずんずん  
織られていくからである。

佐吉の考えは、しだいに高まつていったが、小学校をでただ  
けのかれには、手のとどきそうもない空想になりがちであった。

たまたま、そのころ、東京にはくらん会が開かれた。佐吉は  
上京して機械館へ毎日かよつた。銀色に光つた、たくさん  
の機械は、生きもののように動いていた。かれは、そのりっぱな機  
械をみて、感心するとともに、なんともいえないかた身のせま  
い思いがした。機械は、どれひとつとして、日本製のものは、  
なかつたからである。

「こんなことでいいのか。日本のゆくすえをどうするのか。」  
佐吉は、もう、じつとしていられなくなり、設計図をひいて  
は組み立て、組み立てては動かしてみた。だが、思うように動  
くものは、なかなか生まれなかつた。

佐吉は、一けんの小屋にとじこもつて、いつしんに考えぬき、  
これならという一台の機械を作りあげた。これも、まんまと失

敗であつた。世間からはますますわらわれて、だれひとりあいてにしてくれなくなり、まずしさはいよいよせまってくる。

かれは、勇気をふるいおこして、夜も昼もなく考えとおし、いままでの失敗のもとをとりぞいて、新しい設計図をこしらへあげた。そこでやつと、思いどおりの機械ができた。ためしてみると、はたしてよく動いた。

村の入たちは、ぬのをみごとに織っていく、ふしぎな機械に目をみはりながら、

「よくやつた。」

「えらいものだ。」

といつてほめたたえた。試運転の日、その織機をあやつつて、りっぱにぬのを織つてみせたのは、佐吉の母であつた。それは、

明治二十三年、佐吉が二十四オのときのことである。

あくる年から、豊田式人力織機は、国内につかわれるようになったが、かれは、これに満足せず、すぐ、動力機械を作ることにとりかかった。そこでさらに、七年間のくふうがつづけられ、みごとに、自動織機ができた。これが、日本における自動織機のはじめである。

日本の新しい出発にあたって、この自動織機が、どれほど大きな役わりをはたすことであるう。

しんじゆ

「美しいしんじゆ、

世界じゅうの人から愛されるしんじゆ、

れを、人工で作りだすことはできないものだろうか。

一つぶの天然しんじゆをてのひらにのせて、大きなゆめをえがいていた、ひとりのわか者があった。

しんじゆは、海のそこからまれにひろいあげられる、ふしぎなほう石とされてきたが、しらべてみると、けっして、ふしぎでもなんでもないものであった。

しんじゆ母貝の中に、すなのような小さなものがいりこみ、それに、貝のだすしんじゆ質がまきついて、年とともに大きくなり、天然しんじゆとなることがわかったからである。

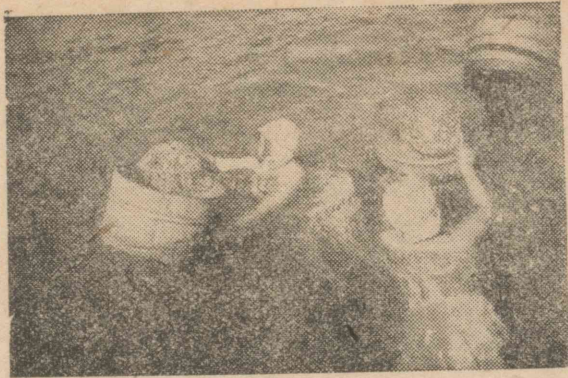
「このわけをあてはめれば、自分のゆめも、実現できないことはあるまい。」

それから、わか者は、しんじゆ貝の研究に全力をつくした。

このわか者こそ、のちにしんじゆ王として世界に知られた御

木本幸吉であった。

「もし、母貝の中に、かくをさしいれることができたなら、しんじゆが発生するにちがいない。」幸吉は、あわつぷほどのかくをこしらえて、それを、母貝の体内にさしいれてみた。うまく貝の中にかくがのこり、しんじゆ質がまきつけば、成功するわけであったが、理論と実際とは、そうやすやすとひとつになるものではなかった。



だいいち、母貝は、そのかくをそとにはきだして、受けつけなかった。また、かくをさしいれたために死ぬものもあつた。

たとえ、はきだしもせず、死にもしないものでも、あとで開いてみると、もとのままになっていた。

同じことをなんどもくり返してみたところで、かわりのあるはずはない。しかも、かくをさしいれてから、しんじゆになるまでには、少なくとも四年はかかる。それが、くる年もくる年も、うまくいかなかつた。

村や町の者は、幸吉のむだぼねをあざけり、そのゆめのような考えをわらつた。

まわりの者から、どんなにあざけられ、からかわれても、その助力者となつてくれたのは、つまのうめであつた。うめは、  
「きつと成功します。世界のために、きつと、あなたの願いが  
かないます。」

こういつて、失望にせず幸吉を、なんどもはげました。

ある年のこと、赤しおが、おびただしく発生した。これは、ある小さな生物が、海水いちめんにあふえて、海水が茶色にかわるほどになるのである。この赤しおのために、母貝はみな死んでしまった。これは、まったく考えてもみなかつたことである。

かれは、新しく母貝を求めてきて、やりなおしにかかつた。町の人のかげ口は、いっそうはげしくなり、かれを気がい  
とよび、やましとさえののしるようになった。

うめは、いつもこのわる口のたてとなつて、幸吉をかばい、苦しみにたえて、なん年かをすごした。ある日、うめが母貝の中をしらべているうちに、一つの半円形のしんじゆを発見した。これは、まえにさしいれておいたかくによつて発生した半円

しんじゅであることが、わかった。

「半田が真田になれば成功するのだ。半分までこぎつけた。あと半分だ。」

幸吉とうめは、たがいはげましあった。それから、しんじゅ貝養しよくの科学的研究がつづけられた。しんじゅ貝にちようどよい海水の温度や、海の深さのこともわかり、しおの流れの早さや、えさのよいわるいなども、はっきりしてきた。

半田しんじゅが思いどおりに取れるようになったので、ひとまずこれを加工して、かざり物として、ともかく、世にだすようになった。

この光明を喜んだのもつかのま、幸吉の心からの助力者であったうめが、この世をさってしまった。

そのうえ、ふたたび、赤しおがよせてきた。そのため、母貝は、ほとんど死んでしまった。その数は、じつに八十五万にもおよんだ。

しかし、幸吉は、くじけはしなかった。研究のため、死貝を一つ一つ、ていねいにしらべていった。すると、かれはきゆうにとびあがった。

「あった。あった。」

ゆめにもわすれられない真田しんじゅが、光っているではないか。幸吉は、それこそ気がいのようになって、死貝をどんどんみていった。すると、五つぶの真田しんじゅが現われた。八十五万から五つぶのしんじゅが取れたわけである。

「うめ、おまえも喜んでくれ。やっと真田しんじゅができたよ。」

かれは、五つぶのしんじゆをいまはなきうめのれいにささげ  
て、その成功をしらせた。

そのころ、幸吉は、すでにしらがの老人になっていた。  
よる年なみにも負けず、研究を重ねたすえ、ついにかくをさ  
しいれるときに、ほかの母貝のがいつまを切り取ってきて、  
一種の手術をほどこすことを発見した。

「これで成功しなければ。」

幸吉は、自信をもって母貝を海中にはなつた。さいわいに、  
赤しおもよせてこなかつた。海水の温度に大きなかわりかたも  
なく、四年めになつた。幸吉は、望みをかけた第一の母貝を開  
いてみた。はたして、真円しんじゆがやどつていた。第二、第  
三と母貝を開いていくと、どれにもしんじゆが、きよらかにか

がやいているではないか。大きなゆめは実現された。

今日、しんじゆの産地は、  
ベルシア湾、セイロン島を  
はじめとして、オーストラ  
リアや南洋の島々であるが、  
日本産のものは、ことに名  
高い。名高くなつたかげに  
は、幸吉一生の苦心がひそ  
んでいる。かつて、パリーのしんじゆ商たちが、幸吉の手にな  
る養しよくしんじゆは、まがいのものであるといった。しかし、  
世界の学者の研究によつて、天然しんじゆとまったく同じであ  
ることが、明らかにされた。





そののち、幸吉は、日ごろそんけいしていたエジソンのもとをたずねて、養しよくしんじゆのつくりかたをこまこまと話した。エジソンはたいへん喜んで、こういった。

「わたしが、研究所でどうしてもできなかつたことが、二つあります。一つは、ダイヤモンドであり、いま一つは、しんじゆで



心した。あなだが自然をあいとし、又しんにあたえられたことに、あたえたことに、心から敬意をささげます。世界の月ならば、  
養するに幸吉は、いやあなだか光明世界の光明を太  
やたしゆ、星の一つにすぎませんと答えたといふことである。

陽とするならば、作製に失敗したわたしは、星にもあたたらな  
いでしよう。

## 六 私 の 妹

### 妹 の こ と ば

私は、きのう、三つになる——まんでいうと二年三ヶ月にな  
る妹をつれて、さんぽにでました。

家から十二三分ばかり歩いたところに、広い草原があるので、  
そこへつれていこうと思ったのです。

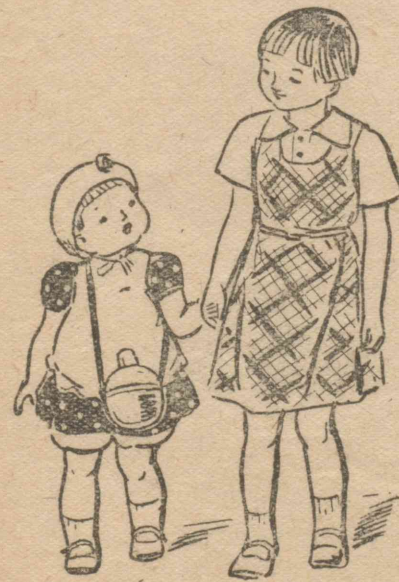
ところが、私たちの足では十二三分のところですが、妹には

そうはいきませんでした。四十分もかかったのではないかと思  
いました。これは、足がおそいというためばかりでなく、道ば  
たにあるものを、なんでもみつけて、それに話しかけたり、そ  
こで遊んだりしたからでした。

私は、べつにいそぐこともありませんでしたので、妹の気の  
すむようにして、つれてい  
きました。

ためしに、私は、妹のいっ  
ていることばを、紙きれに  
書きとめてみたのです。

クロイ ワンワン——キ  
タナイ ワンワンチャン

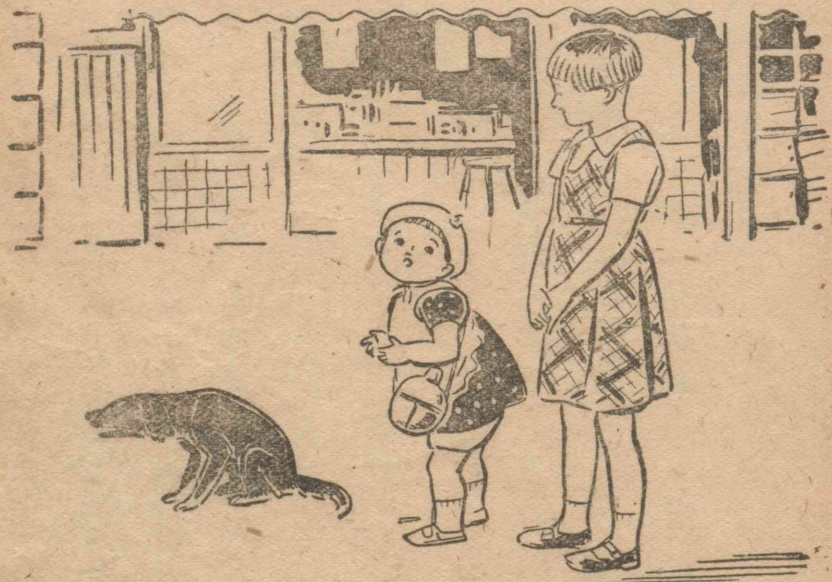


——アンヨ ナメテルワ——クツチケルヨ——フツテ——ハ  
イ——イラナイノ——オハナシシテ——ワンワン——ミテル  
ワ ウシロ——ワンワンチャン——モット——イコウ——ア  
カチャン ネットルワ——ゴメンクダサイツテ——ハイツテク  
ノヨ——ワンワンチャン ネットルワ——ワンワンチャン タ  
ツチ シタ——オスワリ シタ——スイトウ モツテ——オ  
モタイカラ モツテ イツテ アゲルノヨ——ワンワン タ  
ツタ——ハナガ サイテル——キントットガ——ア ドコハ  
イツタノ——イコウ——アツポ タイテル  
よその人には、なんのことが、おそらくわからないうでしよう  
が、そのときのいきさつを知っている私には、このことばの意  
味がよくわかります。

家からでてしばらくいくと、道のまん中に、黒いいぬが一びきすわっていました。グロイ ワンワンは、そのときさげんだことばです。その黒いいぬに近よってみると、ひふ病にかかっている、顔のあたりの毛が、ぬけていました。「キタナイ ワンワンちゃん」といったのは、そのためです。

黒いいぬは、まえ足をあげたかと思うと、その足をなめたので、妹はびっくりして、「アンヨ ナメテルワ」といって、私に知らせたのです。いぬは、うしろ足をもちあげて、せなかをかくようなかっこうをしました。「グツケルヨ」は、足をせなかにくっつけるよ。というのです。そのとき、いぬは、くしゃみのようなことをして、「ブツ」と息をはきました。妹は、わらいながら、「ブツ」と、ひとりごとをいいました。

母がこしらえてくださったパンを、ふくらからとりだして、いぬにやりながら、「ハイ」「ハイ」と、なんどもくり返しました。いぬは、まばたきをしたきり、そのパンをたべようとしません。「イラナイノ」といって、いぬにたずねているのです。やはり、いぬは、ふり向かないので、たべないように、「オハナシシテ」という心らしいのです。とうとう、くるつと、うしろを向いてしまっ



たわけです。

「ワンワンチャンと、こちらを向かせようとしたり、「モットこ  
こで遊んでいたい」と、私にねだったり、そのくせ、でかけよう  
といいだしたりしていましたが、やっと歩きはじめました。

五六歩いったかと思うと、よそのおばさんが、あかちゃんを  
おんぶして、そばを通りました。みると、なるほど、「アカチャ  
ン ネットルワ」でした。

妹は、また、ちよこちよこ歩きだしましたが、よその家の門  
の中へ、はいつていこうとします。そのとき、私をふり向いて、  
「ゴメンクダサイツテ ハイツテクノヨ」と、おとなびたことをい  
いました。

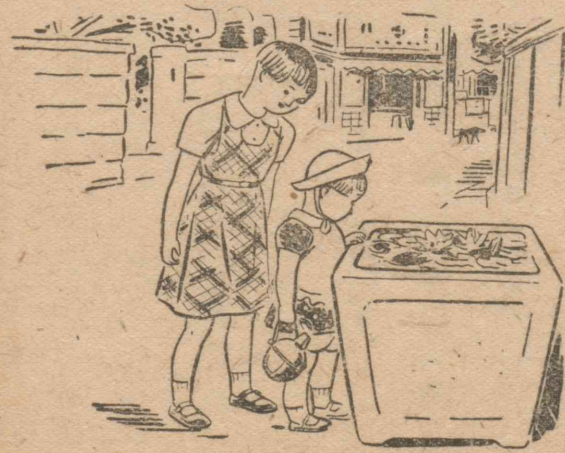
門からもどってきて、道にでたとき、あとをふり向ききました。

すると、さっきの黒いいぬが、ごろんと 地べたに横になって  
ねそべっていました。ワンワンチャン ネットルワと いてる  
と、いぬがもつくりおきました。「ワンワンチャン タッチシタ  
と いて喜びました。「オスワリシタ」と いちいち、いぬの動作  
をことばにして喜びました。

そのとき、いままでかたにかけていたすいとうをはずして、  
手に持つと います。かたにかけると重いから手に持つのだと、  
ませたことをいって、歩きだしました。まだ、いぬが気にかか  
るのか、ふり向くと、いぬは、立ちあがって、のそりのそりと、  
どこかへいくところでした。

あきらめて歩きかけると、水おけがありました。そこに、す  
いれんの花が三つほど、きれいにさいていました。妹は、そこ

へいって、水おけのふちにつかまって、水の中をのぞきました。きんぎよが一びき、すいすいとういてきたかと思うと、また、すぐ水そこへもぐりました。「ハナガ サイテル」「キントットガ」ア ドコヘ イツタノは、そのことをいいあらわしています。自分で、「イコウ」ときめてあるきかけると、道のわきで、たき火をしていました。そのけむりやほのおが、おもしろいらしく、妹は、ここでまた、いろいろなものながめるのです。わづかのことばですが、この中には、妹のすがたが、ありありとうか



んでいます。七五三の記念写真も、思いではなるでしょうが、ことばの記ろくは、妹の心の写真になるのではないかと、ふと、こんなことを考えました。

### 新しい世界

このごろ、私は、作文がすらすらと書けなくなりました。むりに書くと、自分がほんとうに思ったり、感じたり、考えたりしていることとは、ちがったものになります。どうして、こんなふうにゆきづまってきたのでしよう。思うことがどんどんと書けていたまえのころが、うらやましくさえなりました。

あるとき、なにげなく妹の作文をみました。なんと、わけも

なく、すらすらと書いていることでしよう。すこしのこだわりもなく、ぐんぐんと書きつけているその力に、おどろきました。かいこが、皮をぬいで新しく成長していくように、私も、ここで、いままでの作文のからをぬぎさって、新しい世界にふみだしていかうと思ひます。

妹の作文

○ ふくろう

私は、遊び時間にふくろうをみにいきました。そうしたら二年生の男の子が、ふくろうのからだを手でいじりました。ふくろうは、目をくりくりさせて、とまり木の下におりていってしまいました。

男の子は、「おこった、おこった。」と、いって喜びました。

○ コスモスの花

コスモスがさきました。きれいにさきました。白と、もも色と、こいもも色がさきました。いまはきれいだけれど、コスモスは、おじいさんになるとかわいそうですね。



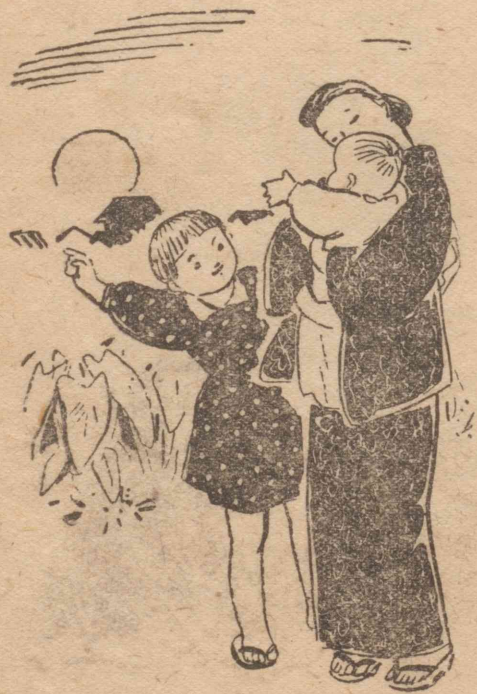
○ いちちょうの葉

算数の時間に、先生が、はしごでいちちょうの木にのぼって、いちちょうの葉をたくさん落してくださいました。みんな負けずにひろいました。うちに帰って、十まいずつたばにして、赤いひもでいわえて数えました。そうしたら、たばが十あって、五まいあまりました。おとなりのよし子ちゃんと、なお子ちゃんに、三たばずつあげました。私は、のこったのをおし葉にしました。



○ お月見

私がおかあさん、ただいま。といって、学校から帰ると、おかあさんが、「ごはんをたべてから、すすきを取っておいで。とおっしゃった。ごはんをたべてから、山の方へ行って、たくさん取ってきた。えんがわにつくえをだして、その上にすすきをかざった。」



月がでてきた。まんまるくてきれいだ。おかあさんに、  
「そとへでて、あかちゃんにもみせてあげて」  
といったら、おかあさんが、あかちゃんをだっこして、おもて  
の通りへでていらっしやった。そうして、  
「のんのさん、のんのさん」  
とおっしやった。私も、  
「ほら、のんのさん、のんのさん」  
と行って、月の方へ手をやったら、あかちゃんは、  
「あ、あ、あ」  
といった。

○ たけのこ

うちのお庭に、たけのこが一本はえてきました。  
私は、たけのこのそばにいて、せいくらべをしたら、はな  
のところまでありました。あしたもあさっても、せいくらべを  
しますよ。

もう、たけのこは、  
私のせいをすぎて、お  
にいさんのせいより高  
くなりました。もう、  
先生のせいくらい高  
くなりました。

たけのこは、人間よりぐんぐん早く大きくなります。たけの





こは、どうして あんなに早くのびるのでしょう。

きのう、風がふいて、ガサガサ音がしたから、なんだろうと  
思って、二階のまどからそとをみたら、大きな竹がによつきり  
ていたので、びっくりしました。

もう、親竹と同じくらいに高くなって、風にゆれていました。

七 ぶす

能りうときょうげんについて

みなさんは、能というものをみたことがありますか。能を  
知らない人でも、おじいさんやおとうさんがおうたいになるうた

いを、きいたことがあるでしょう。能は、そのうたいにつれて、  
役者が美しいまいをまったり、さまざまなしぐさをしたりする  
ものですが、かぶきや、ほかのしばいとも、いろいろちがうと  
ころがあります。いちばんちがうところは、ふつうのしばいで  
は、役者がおじいさんになったり、むすめになったり、わか  
い男になったりするときには、おしろいやべにでけしょうをして  
その役らしく顔をこしらえあげるのですが、能のほうでは、め  
んをつけます。

おじいさんのめん、おばあさんのめん、わかい男のめん、わ  
かい女のめんと、それぞれの人物によって、それぞれのめんが  
あります。そのために、能は、めんの芸術ともいわれ、ヨトロッ  
バの大むかしにさかえた、ギリシアの、同じめんの芸術とくら

べて、研究されています。

日本の絵画や、庭園や、建築にも、外国とはおもむきのちがったおもしろいものが、たくさんあります。能は、その中でも、もつとも日本らしい、すぐれたところのあるものとなっています。みなさんも、大きくなったら、自分たちの国が持っているこのよい芸術を味わうことを、喜ぶだろうと思います。

能といっしょに、きょうげんというものが演じられます。きょうげんはめんをつけません。そうして、能が、美しさを現わす。そうとするのちがって、きょうげんは、ひにくや、あてこすりや、すっぱぬきやひやかしなどで、できているといつてもよく、それをみていると、世の中のうらおもてがよくわかります。ことばも、能はゆう美ですが、きょうげんはそうではありません。

つぎの「ぶす」は、きょうげんの中の有名なものです。

きょうげんには、よく、太郎かじやと次郎かじやが、現われます。かれらは、だんなのねこかぶりをあばいたり、いたずらをしたり、また、とんでもないへまをやったり、だまされたりなど、よわい人間のしそうなことを、なんでもやります。めうえのいばったものに対してもおおそれず、そうかといって、なにをしてもにくまれない、おもしろい人物になっています。

きょうげん「ぶす」

ある村に、けちんぼのだんながありました。おかみさんをもらえば、くらしにもお金がかかり、着物をきせたり、おこづかいをやったりしなければならぬので、ずっと、ひとりてくら

していました。

あるとき、このだんなは、用事で、となり村までいかなければなりません。でかけるとき、太郎かじゃ、次郎かじゃというふたりの下男に、「よくるすをするのだぞ」といいつけ、それから、きびしい声でいきました。

「おくのへやおしいれには、『ぶす』といって、おそろしいどくがはいつている。そちらからふいてくる風にあたつても、たちまち死ぬといわれるくらいだ。ふたりとも用心して、そばへもよらぬことだ。わかったか。」

「はい、はい。わかりました。」

太郎かじゃと次郎かじゃは、声をそろえて返事をしました。

そんなおそろしいどくで、死ぬようなことになってはつまら

ないから、太郎かじゃと次郎かじゃは、はじめは、そのへやの方へは、顔も向けないようにしていました。でも、こわいものはかえってみたくになります。それに、だんなは、ちよいちよいあのへやにはいるが、べつに、からだにさわりもしないのだから、自分たちも、そつといつてみようということになりました。でも、風がどつきを運んできてはたいへんだから、次郎かじゃ、おまえは、せんすであおいで、風を向こうへやってくれ。」

「よしました。」

次郎かじゃは、こしからぬきとったせんすを、さらりと開きました。

「さあ、あおげ、あおげ。」

「あおぐ、あおぐ。」

ふたりは、それをあいずのようにして、ぬき足さし足で、そつ  
どおくのへやに近づき、さきに立った太郎かじゃが、思いきつ  
て、からかみをひきあげました。

「もっと強く、あおげ、あおげ。」

「あおぐ、あおぐ。」

「もっと強く、あおげ、あおげ。」

「あおぐ、あおぐ。」

次郎かじゃのほうで、太郎かじゃよりも、ずっとおくびよう  
者でした。それで、いよいよ、おしいれをあげるときになると、  
「だいじょうぶかい、あぶなくはないかい。」

と、ふるえ声でいいながら、いつでもにげだせるかつこうで、  
こじをうしろにひき、せんすの手だけをまえにつきだして、あ

おぎつづけていました。

そのうちに、太郎かじゃは、おしいれのたなのすみに、だ  
いじそうにしまつてあつた、一つのまるいつぼをみつけ、へやの  
まん中にかかえてきました。

「なにかはいつているとみえて、重たい。」

「それこそ、どくの『ぶす』だよ。」

「それなら、もう、ふたりとも、どつきにあたって死んでいる  
はずじゃないか。それが、死なないのだから、『ぶす』ではない。  
「ふたを取ってみようか。」

「どんでもない。さあ、もとの場所において、あっちへいこう。  
ぐずぐずしているうちに、どつきにあたるにちがない。」

「さあ、あおげ、あおげ。」

「あおぐ、あおぐ。」

思いきって、ふたをあけてみました。べつにどつきもたたず、かえって、うまさうなあまいにおいがして、黒っぽいものはいつていました。

「こんなどくつてありはしない。ひとつ、たべてみようじゃないか。」

「それだけはよしてくれ。なみたいていのどくではないから、かえって、うまさうにみえるのだよ。」

「かまわない、おれはたべてやる。」

ひきとめるひまもなく、太郎かじゃは、すばやく指をつっこんで、すぐそれを、口に持っていききました。

「なあんだ、さとうだ。」

「へえ。」

おくびよう者が、きゆうにいきおいづき、せんすをほうりだして、自分も指をつっこみました。

「ほんに、これは上等の黒さとうだ。」

ふたりは、かわりばんこに指をつっこみました。そうして、うまい、うまいとなめているうちに、つぼが、からっぽになつてしまいました。

「これはこまった。だんなが帰ったら、どんな目にあわされるかわからない。」

おくびよう者の次郎かじゃは、心配になりました。太郎かじゃのほうは、気が強いばかりでなく、わるぢえがあつたから、おちつきはらい、

「おれに、うまいくふうがある。」

といいながら立ちあがり、いきなり、とこのまのりっぱなかけものをひきさきました。

「このうえそんならんぼうをしては、いつそうしかられるじゃないか。」

「まあ、まかせておけ。それから、おまえは、だんながだいじにしているあの湯飲み茶わんを、庭石にたたきつける。」

こう、さしずをされて、しかたなく、ずっしりと重い、大きな湯飲み茶わんを、ふみ石の上で、ガチャンとくだいてしまいました。

そこへ、だんなが帰ってきました。すると、太郎かじやは、きゆうに両手で顔をおおい、おいおい大声をあげてなきました。

した。次郎かじやも、そのまねをして、おいおいなきました。

「いったい、ふたりともどうしたのだ。」

だんなは、あつげにとられてたずねました。太郎かじやは、なおも、おいおいなきながらいきました。

「じつは、だんなさまのおるすのあいだ、私どもは、すもうをとって遊んでいました。私が負けて、ドサリとこのまにたおれたはずみに、あのたいせつなかけものを、あのとおりひきさいてしまいました。次郎かじやは力があまり、茶だなの湯飲みをはねとばして、こなみじんにいたしました。あまりの申しわけなさに、ふたりとも、命をすてておわびをしようと考え、それには、大どくどくがいました。おそろしい『ぶす』をたべて死ぬのが、いちばん早道と思ったのです。が——」

と、そこまで話したとき、いままでおいおいなっていたくせに、  
 きゆうに、にっこりわらい顔になって、次郎かじやといっしょ  
 に歌いだしました。

「ひとくちくえども死にもせず、  
 ふたくちくえども死にもせず、  
 みくち、よくち、  
 ぶすはくえども、  
 死なれもせず。」

太郎かじやと次郎かじやは、こんな歌を歌いながらにげだし  
 ました。だんなは、おこって、  
 「にがすものか、にがすものか。」  
 4と追いかけてました。

愛	院	体	設	功	敬	対
(7)	(21)	(32)	(35)	(39)	(46)	(65)
節	漁	部	囟	理	能	等
(9)	(23)	(32)	(35)	(39)	(62)	(71)
商	員	織	敗	論	芸	
(14)	(24)	(32)	(36)	(39)	(63)	
暗	現	衣	試	際	術	
(18)	(24)	(33)	(36)	(39)	(63)	
読	無	械	才	科	建	
(19)	(31)	(34)	(37)	(42)	(64)	
円	貴	想	然	的	築	
(20)	(31)	(34)	(38)	(42)	(64)	
形	任	館	成	産	有	
(20)	(31)	(35)	(39)	(45)	(65)	

国語 小学校 第五学年用 上

Approved by Ministry of Education

(Date Oct. 14, 1949)

小国 500

著 者

著作兼発行者

文

部

省

昭和二十二年三月二十日 翻刻 発行  
昭和二十四年十一月六日 修正翻刻印刷  
昭和二十四年十一月二十六日 修正翻刻発行  
(昭和二十四年十一月二十六日 文部省検査済)

定価 金十四圓

発 行 者

大阪市西成区津守町五九六番地  
大阪書籍株式会社  
代表者 松村九兵衛

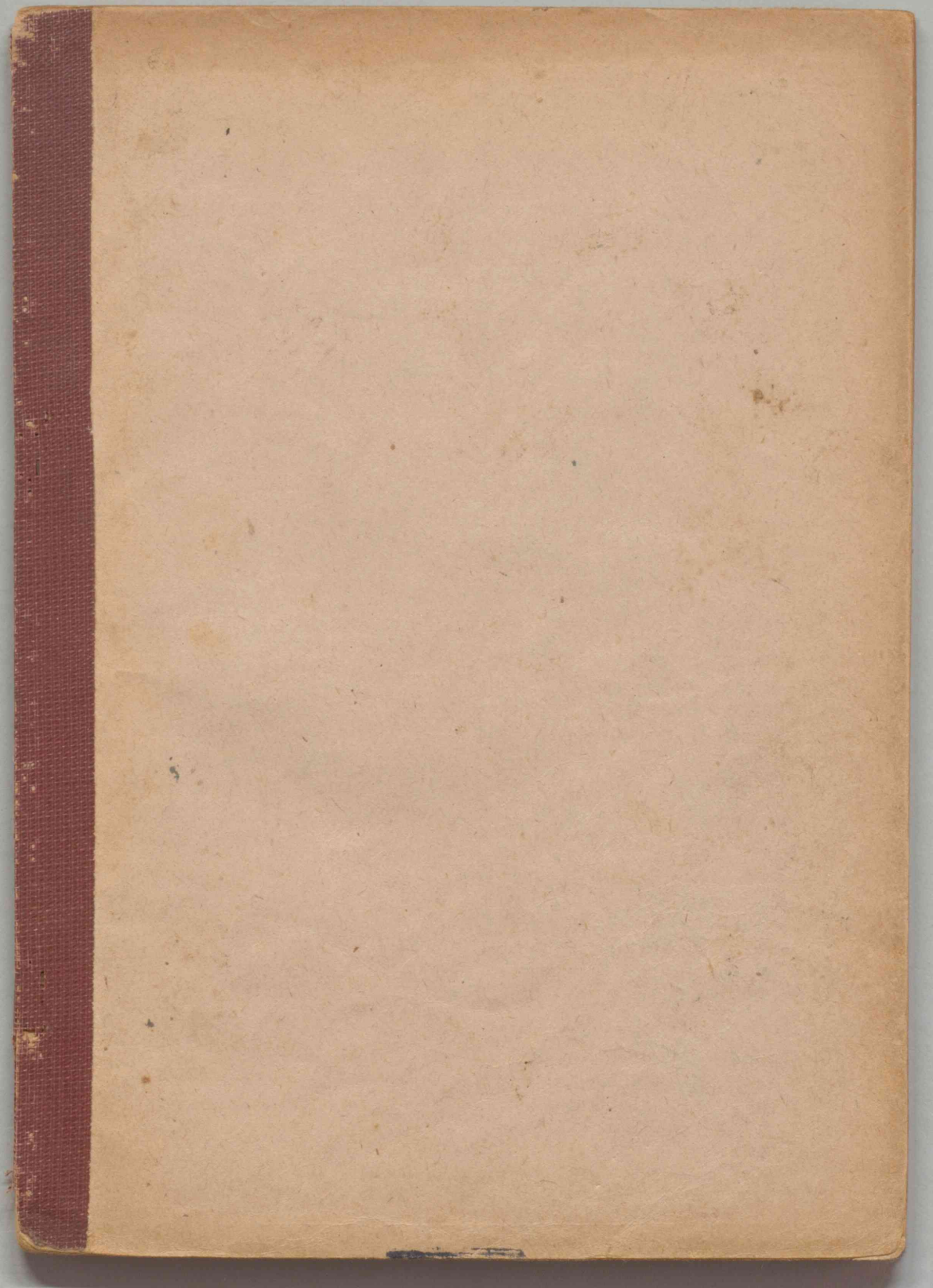
印 刷 者

大阪市西成区津守町五九六番地  
大阪書籍株式会社工場  
代表者 松村九兵衛

発 行 所

大阪書籍株式会社





# 米國の天氣予報

和達清夫



和達清夫氏

米國とカナダとの旅から帰つて、第一に受ける質問は「あの頃の氣予報はよくなりましたか」

大体氣予報は、季節によつて、氣予報はよくなりました。

予報の正確である。

天氣予報の正確を問はしむるに、人工氣象の力を基礎として、人工的の雨を降らすなど、日本新聞にも出たりして、私は、人工氣象はアメリカでは、かなり現用化してゐるものと懸つてゐた。しかし、実際には、目下論争の最中であつたのである。

要するに、雨の降らぬとき

極めて

玉

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078

078



三井銀行が休日の二十三、二十四、二十五日の普通を示し三月



は、国民衆は、  
完全な、  
体制を、  
樹立し、  
つて、南北、  
作、進め、  
が、その、  
日本の、援助、  
い。